琉球大学学術リポジトリ

オセルタミビル予防投与によるインフルエンザ院内感染防止：観察研究と文献学的考察

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2016-04-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En): nosocomial infection, influenza virus A, prophylaxis, oseltamivir
	作成者: 砂川, 智子, Sunagawa, Satoko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33667

（別紙様式第３号）

論　文　要　旨

論　文　題　目

Prevention of a Nosocomial Infection Caused by Influenza Virus A Using Prophylactic Administration of Oseltamivir: An Observational Study with Review of the Literature

（オセルタミビル予防投与によるインフルエンザ院内感染防止：観察研究と文献学的考察）

氏　名　砂川智子　印

論文要旨

インフルエンザウイルスによる院内感染を防止することは、臨床上重要な課題である。本研究では、実際に経験したアウトブレイクを紹介するとともに、オセルタミビルによる院内感染予防効果を検討することにある。まず示したことは、沖縄県におけるインフルエンザ流行に関する定点調査による疫学情報と、琉球大学医学部附属病院における職員、およびインフルエンザ発症患者数が極めて関連することである。すなわち社会においてインフルエンザ感染症が流行した際には、社会の縮図でもある琉球大学医学部附属病院において、職員、または患者さんにインフルエンザが発症する点である。我々はこれまでもインフルエンザの院内感染の事例において、抗インフルエンザ薬による予防内服を実施してきた。本研究は琉球大学病院のある病棟で経験した院内感染事例を詳細に検討したものである。該当病棟では、8人の医療従事者（看護師と

20×20

医師）および10人の入院患者が、インフルエンザ抗原迅速検査の診断結果に基づきインフルエンザウイルス感染症と診断された。インフルエンザの臨床症状を呈する医療スタッフは1週間の自宅待機となり、感染が確定した入院患者は隔離が行われた。さらに、今回の院内感染においてはインフルエンザに感染した患者と濃厚接触をした医療スタッフと入院患者のすべてを対象としオセルタミビルを7日間（75mg、1日1回）の予防投与を開始した。この際に職員、および患者さんの発熱の程度を解析したものの、経過が詳細に追うことが可能であった患者さんにおいても発熱の程度が軽く（平均最高体温は38℃以下）、臨床症状のみではインフルエンザと診断することが困難な症例を多数経験した。うち1例においては、二次性細菌性肺炎を合併し、人工呼吸管理がなされたものの肺炎は完治した。多くの医療スタッフと入院患者は、インフルエンザウイルスによる飛沫感染の影響を受けた可

能性があるものの、オセルタミビルの予防投与により院内感染拡大のアウトブレイクを短期間で終息させることが可能であった。文献学的な考察において、2009年のpandemic H1N1 2009流行以前においては、インフルエンザの院内感染対策として抗インフルエンザ薬を使用したという論文は少数であった。ただしpandemicH1N1 2009流行以降においては、多数の予防内服の事例報告がなされており、多くの論文において、インフルエンザの院内感染において、抗インフルエンザ薬による予防投与は高く推奨されることが考慮されている。

本研究で重要なポイントは、臨床症状に基づいてインフルエンザウイルス感染を診断することが非常に困難であるということである。ただし疫学情報を把握しておくことで、軽度の臨床症状であるにもかかわらず、速やかに抗インフルエンザ薬による予防投与を速やかに開始することで感染拡大を最小限に抑えることが可能となることが示唆された。